HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	《いく・くる》について
Author(s)	城田, 俊
Citation	北海道大学人文科学論集, 14, 135-142
Issue Date	1977-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34330
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_PL135-142.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

《いく・くる》について

城田　俊

1 《いく・くる》と話し手

《くる》は「話し手に近づく移動」,《いく》は「それ以外の方向の移動」を示すとして，三上は断片的ながら《いく・くる》の境遇性を論じています（三上② 36，三上① 19，また，佐久間 192－194 参照)。同主旨の語釈は国語辞書にも見られます（例えば，角川国語中辞典，岩波古語辞典)。

しかし，

○「(私が) 仲の口から茶の間を抜けて電話室の前へ来て，其所で電話室にゐる父と顔を見合はす場合もないとは云へない」(志賀直哉，和解)（引用例に関しては **5** 註記参照）

－1

の例が示すように,《くる》は，話し手に近づく移動どころか，話し手がある個所に近づく移動にも使われます。また，聞き手（の勢力範囲）に近づく移動にも使われます：

○「今日おまへのところへ誰か訪ねて来やしなかったかい」(山本有三，女親)　－2

以上は，第3者を為し手としていますが，第3者のみならず，話し手を為し手とする場合にも用い得ます：

○「(私ハアナタノ家へ) 又其内に出て来ませう」〈電話のことば〉(和解)　－3

以上の例でもあきらかなよう,《くる》は，「話し手に近づく移動」に使われるのが，その典型的な用法であるとしても，それに限られず，聞き手に近づく移動にも，第3者に近づく移動にも使われ得ます。ですから，三上は,《したい，したがる》と同じように,《いく・くる》に関しても,「百パーセントのトキエダ詞，と認めることはチュウチョされる」(三上② 37) とすべきであったでしょう。

森田は,「行ク・来ルの使い分けは，移動の目的地点とそれに対する話し手の立場とからなされる」という見地に立って,《いく・くる》に一論文を棒げていますが，例1における《来る》は,「対象化された」話し手の「話題の場所へ（の）到着」ということをもって，例2，3における《来る》は，話し手と聞き手の融合，(つまり，話し手の聞き手への拡大）によって説明します（森田 78)。それは，それなりに妥当な説明と思われますが，話題はともかく，話し手の自

己対象化とか，融合とかの概念が導入されてきますと，《いく・くる》の用法の全容の説明は，少くとも，はためからは，錯綜として来て，何か重要なポイントが見落されているのではないかという感が深まります。

筆者は，《いく・くる》に関して次のように考えます：

《くる》は，話し手が，当面の話題の物的秩序において中心性をあたえる地点へ近づく移動を示し，《いく》は，中心性を特にあたえてはいない地点へ 近づく移動を示します。話題とは話し手によって語られる内容をいいます。

2．《くる》の意味

話し手は，当面の《話すこと》の意図により，いかなる地点にも視点をすえ，そこを中心として，話す事柄の物的秩序を構成することができます。話し手によって選ばれ，視点がすえられ，中心性が与えられる地点への移動は，為し手が誰であろうと，また，その地点が話し手の立脚点，聞き手の勢力範囲，第３者の影響範囲にあるか，どうかにかかわらず，《来る》によって示されます。すでに，第３者の勢力範囲（例１），聞き手の勢力範囲（例２・３）にある地点への移動が《来る》によって示されている例をあげました。例２，例３は，「話し手が聞き手と共通の場に立つとの意識から発話され」（森田　77）て，両者の一体感が醸成されるのは，話し手が，聞き手と融合しているから，というのも，それなりの説明でしょうが，話し手が聞き手を話題の物的秩序の中心に入れこんだから，と見た方が事実をよりはっきりさせるのではないでしょうか。ここで，第３者の勢力範囲（少くとも，話し手・聞き手の存在地点と直接関係のない範囲）にある地点への移動が《来る》によって示される例を為し手でわけながら，もう少しあげておきます。（為し手＝話し手の例は例１参照）。

(1)　為し手＝聞き手

○「お前も来るなら来い」（和解）　－4

(2)　為し手＝第三者

○その向う側の町の方から盛んにそこまで買ひに来る程，その萩の餅屋は近辺で評判になってゐた。（広津和郎，訓練されたる人情）　－5

○やがて婆さんはそこから２・３丁目さきの警察署にやって来たが，…（伊藤永之介，鶯）　－6

○鮎を上流に放つはいいが，湛水のところへくると，流れがない上に濁ってゐるので，すっかり弱って了ふ。（高見順，流木）　－7

話し手は，いかなる地点にも視点をすえ，それを話す事柄の物的秩序の中心にすることができると述べましたが，話すことに当って，特別の意図がない限り，普通，話し手は，自己の空間的，ないし，質的勢力範囲に中心をおき，そうでないものに周辺性を設定し，物的秩序を構

成します。それが，話すことにあたっての話し手の自然な態度です。

話し手が，中心性をあたえがちな地点というのは，話し手の立脚点からみた空間的影響範囲にあるものと，身内を含めての，所属からみた話し手の勢力範囲にあるもの（例えば，話し手の家，所有物）とに分類されましょうが，両者は区別出来そうでも，実例にあたっては区別困難な場合があります。また，空間的影響範囲は，話すことにあたっての現在位置ココ（「ココ大阪駅に来てくれ」〈大阪駅のそばに住む，ないし，話すことにあたってそこにいる話し手が，そうでない聞き手に云う〉）と，語られる内容における存在位置ソコ（「(大阪駅に着くから)，ソコ大阪駅に来てくれ」）とか区別されます。かかる地点への移動も，それが中心性を持つがゆえに，勿論，《来る》によって示されます。以下，為し手でわけながら，例をかかげます。

(1) 為し手＝話し手

○私も三人目にとうとう席を外して，自分の室へ来た。(夏目漱石，こころ) －8

(2) 為し手＝聞き手

○きのう君が僕のところに来た時，財布をおとさなかったかい。 －9

○「まあ，一二年山へ来て辛抱なさるんですなあ。」と病人達に言ひ残して忙しそうに帰ってゆく院長を…（堀辰雄，風立ちぬ） －10

(3) 為し手＝第３者

○日毎夜毎，機さへあれば私のわきに来る彼女の執心は，…（長与善郎，地蔵の話） －11

○そんなことからお遊さんも叔母のところへ足しげく来るやうになりました。(谷崎潤一郎，蘆刈) －12

(例 12 の到達地点は身内です。)

○「この間(私が)東京で二重橋に行ったら洋服を着た下等な男が十二三人旗を立て、俥でやって来たが，…」(山本有三，女親) －13

(例 13 の到達地点は，語られる内容における話し手の存在地点にあたります。)

3 《いく》の意味

話し手が当面の話題の物的秩序において中心性を特に与えていない地点へ近づく移動は，《行く》によって示されます。便宜上，為し手でわけながら《行く》の用例をかかげます。

(1) 為し手＝話し手

○「且那様，且那様」と看護婦が呼ぶ。自分は行った。(和解) －14

(2) 為し手＝聞き手

○大阪駅へ行ってくれ。 －15

(3) 為し手＝第３者

○左の都の方からそこにゆくのには，大きな山脈を越すか，単調な海岸を伝ふかしなければ

ならない……（阿部知二，地図）　　－16

○医者は五丁程先の糸取工場へ行って留守だった。（和解）　　－17

○事務長が行ってしまふと葉子は急に力が落ちたやうに思った。（有島武郎，或る女）　　－18

4　《いく・くる》のいれかえ

話し手の実体的位置を基準に《いく・くる》が選択されている場合，《いく》を《くる》に，《くる》を《いく》におきかえることはできません。例えば，「大阪駅に来てくれ」「大阪駅に行ってくれ」その他，例 11，13，14 参照。

また，

○外の者は皆又山へ往ったとかで，お増が一人台所片づけに残ってゐる。僕は顔を洗ったなり飯も食はずに，背戸の畑へ出てしまった。（伊藤左千夫，野菊の墓）　　－19

の例におけるよう，話題の構造の中で，非主人公の役を担う第 3 者の，周辺的地点への移行は，（中心が他に設定されているため）《いく》によって示され，《くる》によっておきかえることはできません。その他，例 18 参照。

しかし，話題の構造の中で，主人公の役を担う為し手の移行に関しての話し手の視点の設定は，その構造によって決定されてはおらず，話し手の描写の目的によって決定されるため，《いく・くる》は多々おきかえ可能となります。しかし，両者では，話し手の視点のすえどころがこのなり，それによって，中心性をあたえるものがことなるわけですから微妙とはいえ，無視できない差が存在します。

例えば，

○彼はある日の晩大宮の処にあそびに行った。（武者小路実篤，友情）　　－20

において，《いった》は《きた》におきかえ可能です（宮島　288）。原文通り《行った》の場合は，話し手の視点は「彼」の移動前にすえられており，「大宮の処」という目的地点は，いわば，距離をとって眺められ，客観視され，当面の話題の物的秩序において周辺にくらいすることとなり，「彼」は，後姿となって，周辺に送り出されるかっこうになります。もし，それを《来た》におきかえれば，話し手の視点は「彼」の移動後にすえられ，「大宮の処」という目的地点は，物的秩序において中心に位し，周辺から進みくる「彼」は，前から迎えられるかっこうになります。原文では《行った》が選ばれておりますが，それは，《話し手の視点の位置的転移》という《映画的技法にも比すべきもの》（森田　76）が使われているということになりましょうか。

以上とまったく同じことは，以下の例に関しても云うことができます（森田　76 参照）。

○出演者と一緒に氏が会場に行ってみると驚いた。座席のことごとくは電力工事の人夫が占領してゐて，…（流木）　　－21

《行く》は，コンテストによっては，単なる移動そのものを示し，意味上，《すすむ，あるく，うごく》に近よることができます。

○されば君若し，一の小径を往き，忽ち三条に分るゝ処に出たなら困るに及ばない，君の杖を立てゝ其倒れた方に往き玉へ。（国木田独歩，武蔵野）　－22

それに対し，《来る》は，いかなるコンテキストにおいても，なんらかの程度において中心性を持つものに近づく移動の意義が保たれ，《行く》のように，「無色に近くはな」りません（宮島　289)。それは，《来る》が《行く》との対立において，強い意味を持つからに他なりません。

5．結　論

《いく・くる》は，以上のように，当面の話題の物的秩序において，《中心性》が与えられているものに近づくか，どうかによって選択され，決して，「話し手に近づく」か，どうかによって選択されるものではありません。しかし，《中心性》というものは，《話すこと》に当っての《話し手》の意図により，《話し手》の立場からかけはなれる地点にもあたえられますが，普通は，《話し手》の実存地点に従ってあたえられます。このように，《いく・くる》の選択の基本にある《中心性・周辺性》の対立は，《話すこと》の場における《話し手・非話し手》の対立に，自然に，かかわり得るがゆえに，《いく・くる》は，《話すこと》の場面に拘束され，境遇性を持つように見受けられます。しかし，自然にとはいえ，そのかかわりは或程度においてです。ですから，《いく・くる》がもっとされる《境遇性》は，その程度におけるものにすぎません。《いく・くる》の持つ境遇性は，中心性・周辺性を介しての間接的なものです。人称代名詞（コソアド詞）が，直接的な境遇性を持つなら，《いく・くる》は，或程度，境遇性にかかわるとしなければならないでしょう。《いく・くる》が境遇性を持つというアイデアは魅力的であり，魅力的であるゆえに，実際にあたって見出されるずれにも拘らず，それを認めることに急になりがちです。境遇性をみとめてから，ずれを説明しょうとすると，むづかしい議論になるのではないでしょうか。《くる》は話し手に対する方向性を持つ(宮地　288－289)のではなく，中心に対する方向性を持ち，それが，話し手に対する方向性に重りあう部分ができるにすぎない，と筆者は考えています。

註記　ここで使用した《いく・くる》の用例の殆ど全ては，森田，宮島から借用しました。感謝します。

6．つけたり ―― 境遇性について ――

「境遇性とは，簡単に云えば，場面に左右される性質である。話手と相手とが或る時，或る所で差向いになることによって言葉使いの場面が成立するが，言葉を記号の面から見るとき，対象（または概念内容）との対応が一定不変なものと，場面次第で記号を取替えなければなら

ないのとある。後者の記号の持つ性質を境遇性と名づけておく」(三上② 34, また, 三上① 18 参照。)

1950 年代, ヤコブソンによって, 言語における重要性が強調されたシフター (Jakobson ①) は, より論述が深められているとはいえ, 40 年代, 三上によって論じられた境遇性にみごとに対応します。

「シフターの一般的意味は, メッセージへの言及なしには定義できない。

パークスは, パースが行った記号の象徴 symbol, 指標 index, 写像 icon への分類に関して研究を捧げているが, その中で, シフターの記号論上の特質を論じている。パースによると, 象徴 (例えば, 英語の red《赤》) とその対象とは, 慣習によって連合するよう定められているのであるが, 指標 (例えば, 指し示すという行為) とそれが示す対象とは, 実存的関係の中で結びつけられている。シフターは, この 2 つの機能を併せ持ち, それゆえ,《指標的象徴》indexical symbol の類に属する。その著しい例として, パークスは, 人称代名詞をあげている。人称代名詞 I《私》とは, I《私》といっている人を意味する。かくして, I《私》という記号は, 一方では,「慣習によって」対象に連合するよう「定められて」いなければ, その対象を示すことはできない, ……かくして, I《私》ということばは, 象徴である。しかし, 他方では, I《私》ということばは, その対象と『実存的関係の中』におかれなければ, その対象を示すことはできない。…かくして, I《私》は指標として機能する」(Jakobson① 131－132, 馬嶋訳 152, ただし, 以上の訳は筆者による)。

この 2 人の秀れた言語学者は, 言語における境遇性, シフターへの注目を, 時, 所を異にして, それぞれ別個に行っていますが, そのヒントはイエスペルセン (②－1922 年, 205－209, ①－1924 年, 84) から得ているのは偶然ではありません〔もっとも, 三上は, イエスペルセンに紹介されている「A.Noreenの学説にヒントを得たもの」(三上②, 33) と主張しています〕。shifter は市川, 神保では流用語, 半田では, 流用詞, 馬嶋では転換子 (一般言語学, 152) と訳されていますが, ここではそのまま片仮名書きとしました。

－1977 年 3 月 10 日－

参考文献

佐久間鼎, 現代日本語の表現と語法, 厚生閣, 1955 年
三上章, ①動詞の境遇性, 三上章論文集 18－20, くろしお出版, 1975 年
三上章, ②現代語法序説, くろしお出版, 1973 年
宮島達夫, 動詞の意味, 用法の記述的研究, 秀英出版, 1975 年
森田良行,「行く・来る」の用法, 国語学 75
森田良行, 池上嘉彦他, 語義の記述法, 国語学 88
イエスペルセン, ①文法の原理 (半田一郎訳), 岩波書店, 1959 年

イエスペルセン，②言語（市河三喜，神保格訳），岩波書店，1956年

Jakobson R.,①Shifters, Verbal Categories, and Russian Verb, Selected Writings, II, 130－147, Mouton, 1971〔ヤーコブソン，転換子と動詞範疇とロシア語動詞（長嶋善郎訳），一般言語学，149－170，みすず書房，1973年〕

Jakobson R. , ② Beitrag zur allgemeinen Kasuslehre : Gesamtbedeutungen der russischen Kasus, Selected Writings, II. 23－71

付記　本稿で，《中心性・周辺性》は定義する必要のない用語として，常識的理解，にまかせるかたちで使用されていますが，心理学では，それを様々な境界を現実に設定し，実験的にあきらかにすることが可能であり，或程度の実験がすでになされていることを，本稿を書きそえてから時を経た1977年9月24日に北大文学部において「言語心理学と日本語」と題され，《いく・くる》にも深く触れてなされた興味深い講演後，御講演者である高田洋一郎東京女子大教授，及び，講演後の討論に参加なされた今井四郎北大教授より伺いました。このことを付記し，両氏に感謝の意を表したく思います。　1977．9．30

О глаголах《ику》и《куру》в современном японском языке

Сирота　Сюн

Семантическое соотношение между《ику》и《куру》представляется в виде двучленной оппозиции. В качестве сильного члена этой оппозиции выступает《куру》. В чём заключается сущность положительного семантического признака, отличающеге《куру》от《ику》?

По мнению многих исследователей и авторов толковых словарей японского языка,《куру》выражает движение в направление к самому говорящему или его сфере влияния. Таким образом, по их мнению, у этой пары глаголов наблюдается характер подвижного определителя т.е.《шифтера》по терминологии Р. Якобсона. Однако в действительных употреблениях находятся немало примеров《куру》, выражающих передвижение в направление не только к третьему лицу, но и к слушающему.

Автор этой статьи думает, что《куру》выражает движение в направление к тем пунктам, которые говорящий считает центральными в перядке вещей содержания данного высказывания. Являясь слабым членом,《ику》не имеет своей положительной семантики, и может употребляться в значении движения, направленного к любым пунктам, которые не считаюся говорящим центральными. Представляется возможным уловить истинное значение этих двух глаголов на основе противопоставления центральности-перифелийности, объективно опрелить которое помогут психолингвистические испытания.